ダブル・コンティンジェンシーと社会システム創発に関する一考察

池　田　有　二*

まえがき
第１章　二重条件依存性としての DK と社会システム
　第１節　パーソンズにおける二重依存性としての DK
　第２節　二重依存性と社会システム
第２章　二重不確定性としての DK と社会システム
　第１節　ルーマンにおける二重不確定性としての DK
　第２節　DK と社会システムの創発
あとがき

まえがき

「社会的なるもの」、社会の秩序問題を考察する場合、従来、社会の構成要素を個人、あるいは個人の行為と捉え、社会はそれらの構成要素から成り立つという考え方が主流であった[1]。と同時に、社会は個人の集合、あるいは行為の集合であるが、同時に社会は構成要素の集合を超えており、個々の

*福岡大学経済学部

[1] G，クニール、A，ナセヒ　ルーマン「社会システム論」舘野受男他訳　新泉社　1995年　77p

要素に還元してしまうことが不可能な、創発水準のものであると考えられてきた。となれば、このような要素概念にもとづいて、ミクロの要素レベルの総合を経て、マクロの社会レベルに到達することはもちろん、マクロで生じる創発特性について説明することができないことはいわば自明の理であろう。

社会行為理論は、行為を社会システムの要素と捉える見解であって、ウェーバーの行為理論を嚆矢とし、パーソンズの行為システム理論にいたる一大潮流として展開されてきた。初期ルーマンにおいても、社会システムを行為システムとして「意味をとおして諸行為を互いに結びつけ、他の諸可能性を有している環境からは境界区分されるシステム[2]」と定義された行為概念を採用していた。

本稿では、まずその代表的見解としてタルコット・パーソンズ（Talcot, Parsons）の社会システム論の柱石たるダブル・コンティンジェンシー問題[3]を批判的に吟味をおこなう。次いで、その後、ニクラス，ルーマン（Niklas, Luhmann）がパーソンズの問題提起を受け止めて、オートポイエーシス論の立場からさらに展開したダブル・コンティンジェンシー問題[4]（以下、DK）

---

[2] 馬場靖雄他訳『目的概念とシステム合理性』勁草書房　123p

[3] Hrsg. von Talcotto Parsons und Edward Shils, Toward a Generaru Theory of Action,Cambridge Mass. 1951, S3-29 (16),（T. パーソンズ・E. シルス編者、永井道雄・作田啓一・橋本真約『行為の一般理論をめざして』日本評論社1960年、３～47P　そこにおけるパーソンズの重要な言明を抽出しておくと、「ダブル・コンティンジェンシーは、相互作用にかならず見いだされる。…（中略）…このダブル・コンティンジェンシーのゆえに、コミュニケーションが、文化パターンのもっとも重要な課題なのだが、そうしたコミュニケーションは、特定の諸状況（それは自我にとってと他我にとってとではけっして同一ではない）の特殊性からの一般化と、当事者双方によって遵守される「慣例」によってのみ保証される意味の安定性との双方がなければ、ありえないだろう」といった、後述する結論がすでに見受けられうる。

[4] N. Luhmann, Soziale Systeme：佐藤勉監訳「社会システム論」恒星社厚生閣1993年158～213p

をパーソンズのそれとの比較の上でまとめることを主眼とする。ルーマンはパーソンズのDKの捉え方を批判し、そこに文化決定論の過ちを指摘しているが、ルーマン自身、パーソンズのDK論を高く評価していることは、文中でふれている[5]。

このようにDK問題が、パーソンズによってはじめて本格的に取り上げられ、しかも、この問題を中軸として社会システム理論が構築された嚆矢となっていることは高く評価すべきであるが、われわれは、これをオートポイエーシス理論の立場から捉え返し、進化拡大させたN．ルーマンの二重不確定性の議論への橋渡しと捉え、次なるN．ルーマンのオートポイエーシス的社会システム論を本格的に論じる準備作業としたい。

第１章　二重条件依存性としてのDKと社会システム

パーソンズは、DK問題を解決しようとして、それに見合った行為概念を構想することから始めている。行為概念についてもウェーバーのそれ、初期パーソンズ、中期パーソンズ、そしてルーマン自身においても時期によってそれぞれ、内容、扱いともに異なっている。

タルコット・パーソンズ（Talcot，Parsons）がその先鞭をつけたダブル・コンティンジェンシー問題の取扱は、方法論的集合主義[6]の立場[7]から社会秩序創発の解明を目指した嚆矢であり、社会的なものとの関連において行為の解明を目指すと同時に、そうした社会のあり様に対する行為者個人の側での自律性の余地を可及的に認めつつ、社会的なものによって行為ははぐくまれ

[5] N. Luhmann, Ebenda, S149 邦訳（上）159p　本稿第１章第１節５p

[6] 方法論的個人主義に対して，全体はそれを構成する部分や要素のたんなる総和を超えた独自の性格をもつ客観的実在であって、部分や要素のに還元して説明することはできず、全体そのものを包括的に捉えなければ成らないと言う方法論上の立場。

るものの、特定の社会のあり方に対して諸個人がヴォランタリスティックに対応するという相依相即的な行為理論の基本構想にたって、社会創発の立論をめざしたことは大いに評価されてしかるべきと考える。

第１節　パーソンズにおける二重依存性としての DK

本稿では、はじめにタルコット・パーソンズ（Talcot，Parsons）の構造－機能主義の理論体系を本格的に示した彼の主著「社会体系論[8]」をとりあげ、パーソンズの社会秩序論を考察する。その核心は「動機づけの制度的統合の公理」とともに DK にあると考えられる。したがって、パーソンズの DK についてこれを批判的に検討を加え、あとに続く N．ルーマンの「オートポイエーシス」に基づく二重偶然性としての DK へと繋ぎたい。

パーソンズは彼の中期の主著である『社会体系論』において彼の構造？機能分析に依拠した社会理論の概要を大きく四つのステップの理論構成において展開し[9]、なかでも秩序問題については二つの側面があり、第一の主題は，社会システム分析の行為論的基礎にかかわるもので、いわゆる「自我と他我の動機志向の相互性に関する秩序」の問題であり、行為準拠枠（action frame of reference）と呼んでいるものである。もう一つは第二の主題である社会システムの構造にかかわるもので、いわゆる「コミュニケーションを可能にす

---

[7] 佐藤勉「コミュニケーションと社会システム」佐藤勉編　恒星社厚生閣　1997年　404p、方法論的集合主義においては行為と社会システムを二者択一的に一方から他方への説明に到ろうという立場ではなく、社会的なものとの関連において行為を究明すると同時に、そうした行為と行為の関係から創発される社会的なもののリアリティに迫ろうとするのが、この立場の基軸をなす

[8] Parsons, T., The Social System., Glencoe, Ⅲ New York : The Free Press, 1951（現代社会学大系14『社会体系論』佐藤勉訳，青木書店、1974。）

[9] 富永健一「行為と社会システムの理論」東京大学出版会、1995年　121～124 p

るシンボル体系の秩序」の問題である。このうち、パーソンズが重視したのは、前者すなわちパーソンズの主著の一つ「社会的構造[10]」のなかで「ホッブス的秩序問題」とよばれる問題である。

パーソンズは、社会的行為の原型として自我と他我の相互性の状況を検討した上で、ホッブスの提起した問いを行為論の立場から定式化しなおした。ホッブスは、「自然状態」のもとでは「万人の万人に対する闘争」が起こると考えた。このようなホッブスの認識のなかに、人間の「本性[11]」についての規定がなされているが、そのような実体論的把握ではなく、今日的認識においては、社会的・文化的・歴史的な規定と相依相即的に認識されるほかはないことは明白であるが、ホッブス的人間観の中核をなす「競争」「不信」「自負心」によって特徴づけられる原子論的な個人は、西欧近代の自律的な人間観・個人の少なくともその一面を反映していたと考えられる[12]。

パーソンズは、秩序問題を再構築するにあたって、ホッブスにおける人間観の部分偏重的要素を是正する必要から、自我と他我の相互作用の条件を社会的行為論にもとづいて一般的な水準で定式化しなおした。

パーソンズによれば、相互行為を行なう過程では、自己の行為は他者の行

---

[10] タルコット・パーソンズ「社会的構造の構造」稲上毅。厚東洋輔訳　木鐸社刊　1974年

[11] ホッブスによれば、人間は、①その本源的な平等性のゆえに目的を追求する過程で競争し、②自分の安全を求めて他者に不信を抱き、③自負心という三つの人間の「本性」があらわになることによって、万人の万人に対する闘争が引き起こされると考えた。長谷川公一　佐藤勉編　68p　正村俊之　佐藤勉編　前掲書　232p 参照のこと。

[12] パーソンズは、19世紀までの西欧の社会思想において謝意的な理論的枠組みを『社会理論の功利主義的体系』と規定し、それは、一、原子論的個人主義、二、行為の目的に対する手段の合理性、三、概念図式と具体的実在との関係に関する経験主義的理解、四、行為相互の目的間のランダム性の四つによって特徴づけられるとしている。長谷川公一「コミュニケーションと社会システム」佐藤勉編恒星社厚生閣　1997年　68p 参照

為の選択に依存しているが、他者の行為も自己の行為の選択に依存している。そのために、自分の行為を決定できなくなる可能性が生まれる。パーソンズは、このDKにもとづく決定不能性を克服することが秩序問題の核心をなしていると考えた。パーソンズの出発点は「どのように自分自身が行為するのか、およびどのように自分自身がその行為を相手の人に接続しようとしているのかに、相手の人がその行為を依存させており、その立場を代えて相手からみても同様であるのなら、相手の人の行為も自分自身の行為もおこりえないということ[13]」にあった。自我と他我の行為の相互循環的な依存関係があり、この自己準拠的[14]な循環によって、行為は規定不能にされている。

このような相互作用状況におけるコンティンジェンシーは、他我と自我とが互いに関与することによって二重化されていて、それが行為の規定性を阻んでいる。さらに自我と他我の双方でDKが自覚されるので、さらに二重化された二重のコンティンジェンシー、すなわちパーソンズにおいて把握されたDKは「二重の条件依存性」という性格のものである。このDK問題が解決されなければ、いかなる行為も生起しえないという意味でこの問題の解決は、社会的行為の可能性、成立の根本条件ということができる。

この決定不能的状況におけるパーソンズのDK問題の解決は、パーソンズは、人びとが想定した価値コンセンサス、人びとが一様にいだいている規範的指向、つまりは「コード」のような規範的性格を有している「分有されたシンボル・システム」、すなわち「価値（規範）の共有」によってDKの問題の解決がなされるというのが解答であった。価値・規範の共有がなされておれば、自他の行為の選択の不確実性が減少し、相互の行為の期待に見通し

[13] N. Luhmann, Ebenda, S149 邦訳（上）158～159p

[14] 自己準拠（self-reference）について、ルーマンは、まず準拠というオペレーションは、あるものをそれ以外のものと区別することによって、そのあるものを表示するオペレーションであり、自己準拠とは自己に基づいて自己を表示することと説明する。N. Luhmann, Ebenda, S600～601 邦訳（下）807p

が立つからである。そうであるならば、その問題定立はもっぱら過去に移し変えられているというのである。

そのようなわけで、社会的文化的進化は、逸脱した社会化として把握されるとしたままであり、社会システムの構成によって文化的コードの発生とその機能を解明しなければならないのに、基本的に社会システムの構成はつねにすでに存在している文化的コードに依拠しておこなわれると考えられたのである。

このような期待の相補性が形成されるのは、文化的な価値の共有（AGIL）にもとづくがゆえに、さらにはそれを可能とする社会化によるというものである。

パーソンズは、秩序問題を「自己の行為と他者の行為の連関」の問題として捉え、AGIL 図式を提唱した際、行為システムを「適応（A）」「目標達成（G）」「統合（I）」、すなわち社会コミュニティ、「潜在的なパターン維持と緊張処理（L）」すなわち文化とパーソナリティという四つのサブシステムに分類した。これら四つのサブシステムは、それぞれが分担している機能的要件を達成することによって、境界維持をなしつつ、境界間の相互交換をおこなっている。それらの間には「制御と条件づけ」という二重の関係が存在していて、制御の面についてみれば、情報性の高いサブシステムは情報性の低いサブシステムを制御している。すなわち、文化システムは社会システムを、社会システムはパーソナリティ・システムを制御している。こうして文化システムを構成している価値が自我と他我の間で共有されることによって、自他の行為選択の不確実性が減少し、二重の条件依存性にもとづく決定不能性が克服されることになると説明した。このようにしてパーソンズは、ホッブスのように近代的人間像を想定することなく、秩序問題を定式化した。

このようなパーソンズの着眼の卓越性について，ルーマンは、

⑴　DK が行為の可能性の不可欠の前提であり、

⑵　行為システムの要素である行為は、この行為システムにおいてのみDK問題の解決をとおしてのみ構成されることを示したことにあるという[15]。

このようなパーソンズの立論に対しては、1960年代以降、論理的、倫理的に繰り返し批判を浴びてきた。まずルーマンもいうように、あらゆる相互行為において文化的伝統が前提とされているのならば、当の文化的伝統の変化はいかにして生じてくるのかについての説明については不問に付したままであることに、パーソンズ理論は厳しい批判にさらされてきた。このことは人々の合意、コンセンサスという社会的次元のみにダブル・コンティンジェンシー問題を切り詰めたことを意味する[16]。馬場靖雄は、「論理的にこのことは、この議論では説明されるべき結果があらかじめ前提されてしまっていることである。DKのなかから、共有されたシンボルのもとでのコミュニケーションが可能な状態がいかにして生じてくるかこそが、説明されなければならないにもかかわらず[17]」であり、同様に河本英夫も「この議論の立て方は論理的に不確定なものが、まるで整合的なものであるかのように作動するのは、それにふさわしい根拠があるからだというものである。相互行為の不確定性は、共有された根拠によって補われ、不確定性を含む相互行為は、この根拠に支えられていることになる[18]」と論難する。次に倫理的な批判として、馬場は、「パーソンズ流の理論構成からは、共有されたシンボルおよび規範が織りなす『社会体系の文化的伝統[19]』がつねに尊重されるべきだという保守主義的なスタンスが見て取られるからである[20]」と問題点を指摘し

---

[15] N. Luhmann, Ebenda, S149 邦訳（上）159p
[16] 村中知子「ルーマン理論の可能性」恒星社厚生閣　1996年　144P
[17] 馬場靖雄「ルーマンの社会理論」勁草書房　2001年　68p
[18] 河本英夫「オートポイエーシス」青土社　1995年　260p
[19] Parsons T., The Social System., Glencoe, Ⅲ New York : The Free Press, 1951 43
[20] 馬場　前掲書　68p

ている。

しかし、DK 問題は、上記の論理的、倫理的諸批判を克服することによって、解決されるというよりも、DK 問題自体の理論的枠組みとそれにふさわしい解決を必要としており、その解決の仕方をめぐってパーソンズとルーマンとは袂を分かつ。この問題は第 2 節、および第 2 章で論じることにする。

第 2 節　二重依存性と社会システム

上記のごとく、パーソンズは、ホッブズ的秩序問題に対し、その解答を「自己の行為と他者の行為の連関」という方途によって定式化した際、近代的人間の主体性・自律性に対するホッブスの人間観における部分偏重的な要素の特殊性を排除しただけではなく、J. C. アレグザンダー[21]も批判するように、社会理論が主意主義的であるために初期パーソンズにおいて重視していた個体的な自律性､すなわち具体的・経験的な個人とは異なって, 中期以降のパーソンズには「理念主義的」偏向が強まり、個人を脱実体化して捉えるはめになり、個体的な自律性、不確定性（kontingensy）という、秩序問題を定式化するうえで考慮に入れなければならない要因そのものが希薄化してしまった。その結果、秩序問題を、一般的レベルで定式化したかわりに佐藤や正村[22]の指摘したとおり、社会的行為連関（社会的次元）の問題に縮減してしまうという結果となった。

この問題について、ルーマンの自己準拠的システム論の理論的枠組みを背景にして、パーソンズの社会的行為システム論を捉え返すことによって、パーソンズの社会システム論の理論的枠組みと論理的不備、その上でその理論的射程の限度について検討している佐藤、村中、正村の見解を紹介し、次

---

[21] J. C. アレグザンダー，ベルンハルト・ギーゼン「ミクローマクロ・リンクの社会理論」新泉社　1998年　38～41p

[22] 正村俊之「社会秩序はいかにして可能か？」佐藤勉編　前掲書　235p

章の準備作業としておきたい。

正村はルーマンのDK問題の解決における基底的自己準拠と社会的自己準拠との相互規定的、相互促進的関係の社会システム創発理論[23]を参考にし、これを図示しつつ、パーソンズ理論の彫琢をおこなっている。その見解[24]を紹介すれば、「自己と他者が相互行為をおこなう場合、そこには二つのタイプの行為連関が成り立っている。一つは、自己の行為と他者の行為との連関（社会的行為連関）であり、もう一つは、自己（他者）が行なう諸々の行為の間の連関（個体的行為連関）である。この二つのタイプの行為連関は、同一の相互作用を構成している以上、実体的に分離できるわけではないが、社会的な相互行為には、この二つの行為連関を産み出す二つの作用が働いていて、その二つの働きを区別する必要がある[25]」と述べている。少々解りずらいが、要するに、ルーマンの自己準拠の理論の構成にしたがって、その理論的枠組みを社会行為レベルに適用した場合、社会的行為連関の確立のためには、自己と他者は、それぞれ自分の行為を、相手（他者）の行為と関連させて選択するのみならず、自分の他の行為にも関連させて選択することができなければならない。後者の選択、すなわち個体的行為連関（基底的自己準拠に対応）が確立されてこそ、長い時間的経過を要する社会的行為連関（システム的自己準拠－再帰に対応）をもたらすことができるというものである。その意味で社会的行為連関の確立は、個体的な自律性という、自己と他者のそれぞれの個体的行為連関に支えられているということができる。

また逆に、「一方、個体的行為連関を確立するには、自分の行為と自分の他の行為との関連のみならず、相手の行為にも関連させて選択できなければならない。相手の行為に関連づけるためには、相手のみならず、互いの行為

---

[23] N. Luhmann Ebenda，邦訳（上）202～205p

[24] 正村俊之　前掲書　234～236p

[25] 正村俊之　前掲書　234p

を制約している第三者的視点に立つことも必要となってくる[26]」と述べているように、両行為連関の相依相即的関係のなかに社会の創発を捉えようとするものである。社会的行為連関と個体的行為連関は、相克的な可能性を秘めつつ相互媒介的な関係にある以上、個体的行為連関との関係を考慮せずして社会的行為連関を理解することはできないのは、けだし当然であろう。佐藤もパーソンズ理論が社会的なものの関係において行為を分析しつつも、社会の価値がパーソナリティに内面化される面だけがクローズアップされてしまい、個人が社会に浸透する経緯についてはきわめて不十分にしか検討されていないことを指摘している[27]。

パーソンズのばあいのように社会秩序の形成は、単なる社会的な共存性の確立ではなく、上記のような意味での個体的な自律性と社会的な共存の両立、すなわち、ダイナミックなマクローミクロ・リンクにあることを十分に捉えきれず、より縮減された形で、しかもスタティックな定式化におわったということができるであろう。

ルーマンがいうように、秩序問題は、パーソンズが考えた以上に複雑な性格をそなえており、「社会秩序はいかにして可能か」という問いに答えるためには、このような複雑性を射程にいれた理論を構築しなければならない。パーソンズは、ルーマン流にいえば、社会的な複雑性を縮減するメカニズムとしての価値（規範）を重視したが、「価値（規範）の共有による社会秩序の形成」というアイディアは、現代社会の高度に機能分化した複雑性に対応しきれるものではない。その主たる理由は、パーソンズが秩序問題の複雑な性格を捉え損なったことにある[28]。

ルーマンによれば、パーソンズの DK 問題の解決は価値共有という意味の三次元のうちの一つである社会的次元に限定したものであった。その結果、

---

[26] 正村俊之　前掲書　234～235p
[27] 佐藤　勉　前掲書　405p

そもそも関与者のパースペクティブの差異（不一致）からもたらされる社会的次元の問題性をも、価値の共有による一致というせまく単純な次元で捉えてしまったのである。その結果、価値の生成とその変化という問題は、価値の共有によって不問に付されてしまうこととなった。さらに、同じく意味の三次元のうちの時間次元[29]についても、システムの持続問題というかたちで処理されてしまっている。したがって、パーソンズのダブル・コンティンジェンシー問題の解決は、社会的次元においても、時間次元においてもきわめて不十分であるということができる。ルーマンは、パーソンズが共有された価値にもとづくDK問題の解決というきわめて限定された解決方法を示すにとどまっていて、それ以外の「別様の解決可能性」が射程の外に置かれたことを批判している[30]。このことについては次章で論じることにしたい。

第2章　二重不確定性としてのDKと社会システム

パーソンズもルーマンもそれぞれの機能主義的方法によって社会秩序問題を取り上げることについては共通であるが、パーソンズの場合、社会システムの存続の諸要件に関する理論として構造－機能主義という一因一果の不変関係（構造）にその存続を託するという因果関係としてのアプローチであっ

---

[28] N. Luhmann, Ebenda, S.149p 邦訳（上）159p　ルーマンによれば、パーソンズのコンティンジェンシー概念の把握は「～に依存して」という把握にとどまっており、相互依存性の強調の結果、理論的には相互調整的性格の理論にとどまってしまっている。それ以外の本来のコンティンジェンシーという「別様の可能性」という様相論的な把握がきわめて不足しているという。パーソンズの問題提起は正しかったものの、コンティンジェンシーの本義並びにその解決方法において、不十分であるという。

[29] N. Luhmann, Ebenda, S.149p 邦訳（上）160p　ルーマンは、パーソンズのようにDK問題を、もっぱら社会的次元にゆだねた解決以外に、それに代わる機能的等価物、たとえば時間的次元での機能的等価物があることを指摘する。

たのに対し、ルーマンにおいては、社会システムは、それまでのはたらきが作動しなくなることに対して、そのシステムの構造の変化とシステム問題の諸要件の変化とによって対処しうる可変的なものであることが認められるようになってきていることから、多因多果な複雑な連関においてコンティンジェントなものとして把握することができる、存在論に拘束された因果性にしばられない機能的方法を等価機能主義として提示している。いうなれば、問われているものは、システムの存続にとっての効果的なはたらき・「存続問題」ではなく、「システム」問題であり、存続定式は、問題定式と交代しており、問題そのものを問題としてとりあげうる用意が準備されている。

「比較可能性を抽象的に構成することによって問題定立を合理化することが、機能的方法の固有の意義である（ルーマン）」。ルーマンはこうした問題定式による問題の拡張に、機能的方法の独自性があると考える。その意味で、機能主義の内容「ノーマルな状態の仮象を打破すること、……そのための方法論上の処方箋は、ノーマルなものが不確実である（unwahrscheinlich）「不確実性の公理[31]」とみなすことのできる理論を形成することである[32]」ルーマンの「機能主義的パースペクティブ」は、そうした世界の不確実性・非自

---

[30] 佐藤　勉　前掲書　8～12p
個人の側からの社会に対する独自の解釈、対応等についての理論がパーソンズ理論のなかに不十分なのは否めない。同じことは、パーソンズ理論が社会的なものの関係において行為を分析しつつも、相互浸透過程において、社会の価値がパーソナリティに内面化される面だけがクローズアップされてしまい、個人が社会に浸透する経緯については不十分な扱いでしかないことも多く指摘がなされている。このことについて佐藤は「興味深いことに、方法論的集合主義の立場から行為を解明しようとするパーソンズの課題設定は、多数のパーソンズ研究者達よりは、コミュニケーションから行為を明らかにする企てとして、ハーバマス（Jürgen，Harbermas）とルーマン（Niklas，Luhman）によって確実に受け継がれているといってよい[30]」と述べている。

[31] N. Luhmann, Ebenda, S.149p 邦訳（上）176～180p

[32] N. Luhmann, Ebenda, S.149p 邦訳（上）176～177p

明性を見据える視点として設定されており、秩序問題も、その視点に立脚して取り扱われることになる。

第１節　ルーマンにおける二重不確定性としての DK

パーソンズの DK とは「二重の条件依存性」という性格ものであった。そして、この事態をパーソンズは、自－他に共有される共通の規範を導入することによって乗り切ろうとした。二重の依存関係によって二重に不透明になっている相互行為が、多くのばあい大した混乱もなく遂行し続けられるのは、ともに共通の規範を共有しているから可能となると考えた。

ルーマンも、パーソンズと同様、DK を行為の不可欠の条件であり、社会の秩序問題の原点に据えたが、行為やコミュニケーションを行なう場合にのみに現れるのではなく、それは意味の構成と意味の継続的な処理を行なっているオートポエティック・システムにおいてはつねに潜在するものであって、そのもとでの大幅な捉え返しであった。

以下、この節ではパーソンズとの比較において、ルーマンの DK の特徴をまとめておき、第二、第三の項目については、第二節でさらに詳説する。

一　二重の不確定性

パーソンズにおいて「二重の条件依存性」として把握されていた DK を、ルーマンは「二重の不確定性・偶然性」として捉えている。すなわち、自己と他者は互いに相手にとっては、ブラック・ボックスであり、それぞれの境界内部でおこなわれる自己準拠にもとづくオペレーションをとおして各自の行動を選択するが、相手の選択は不確定性のもとにあり、相手は「必ずそうする」とも「それはありえない」ともいうことができないという意味で、「必然性と不可能性の排除」を表す概念としてコンティンジェンシー概念を用いている[33]。そうした二つの選択的行為がなんらかの結合のしかたをする DK

状況における相互作用において不確実性は倍加されることになる。しかも、相互行為の状況では、パーソンズが認識したように、自他の行為は互いに依存しあっているから、相互行為に内在する不確定性は、[二重の条件依存性]に対応して二重化されることになる。このように二重化された不確定性が、ルーマンのいう「ダブル・コンティンジェンシー・DK」である。

二　不透明なブラック・ボックスからなんらかの透明性への移行[34]

パーソンズが二重の条件依存性にもとづく不確定性（決定不能性）を、価値共有による秩序形成によって克服されるべき問題として把握したのに対して、ルーマンは、次の言説にみられるように、じっさいにはこの二重の不確定さからまさしく秩序はもたらされているのであり、社会システムの創発とオートポイエーシス的状況の発端をもたらすというポジティブな要因として捉えていることである。すなわち、「このDKの条件のもとでは、それぞれの自己決定がどんな偶然におこなわれたとしても、どのような計算に基づいているとしても，相手の行為にとっては、情報価値と接続価値を有しているからである。まさにこのようなシステムが閉鎖的で自己準拠に基づくものとして形成されているがゆえにそれぞれの偶然、それぞれの衝突、それぞれの思い違いがシステムを生み出すのである[35]」と述べている。

本項では二重の不確定性は、システム形成を促す触媒的な作用を果たすことについて説明をするが、ルーマンは不確実性の公理[36]において、一つはこ

[33] N. Luhmann, Ebenda, S152，邦訳　163p

[34] N. Luhmann, Ebenda，邦訳　168～169p　これもルーマン特有の用語の１つであり、「二つのブラック・ボックスはどんなに努力してもまたどれだけじかんをかけても，互いに相手を見通しえないままである……それぞれの黒い箱は、互いに出会うと、いわば「白さ」を生み出しており、とにかく互いに交渉するに十分な透明性を作り出している」と述べている。

[35] N. Luhmann, Ebenda，邦訳180p　その次下においても、「ノイズ」なしにはいかなるシステムもありえないといった

の章のまえがきにも触れているが、理論の形式にかかわる科学論のあり方、すなわち分析的関心としては、ノーマルな状態の仮象を打破すること、現行の経験や習慣について批判的に考察してその正体を見破ることであり、そのための方法論的処方箋として、ノーマルなものが不確実なものである（un-wahrscheilich）とみなしうる理論を形成することであり、第二には、DK の問題を徹底させることから、「社会秩序の可能性がなによりもまず不確実であるということ[37]」から説明を始める。

DK 状況とは，二つのブラック・ボックスが DK にもとづいて相互作用する状況である。たがいに遭遇しているブラック・ボックスは、ルーマンもいうように、「自我は他者を、他我として経験する。しかし、自我は、パースペクティブのこの非同一性と同時に、両方の側でのこの経験の同一性をも経験する。それによって状況は、両方の側にとって不確定で、不安定で、耐え難いものとなる[38]」。そこで、それぞれの自我はそれぞれの境界内部でおこなわれる自己準拠にもとづく複雑なオペレーションをとおして、それ自体の行動を決定せざるをえない。そして、いずれかになんらかの行動がなされたならば、それは、ブラック・ボックスについての手がかりとして、複雑性の縮減としての機能をはたしていることになり、次にその行動を手がかりとして、前に進むことができる。すなわち、行動によってもたらされているものは、次なる出方、すなわち選択の蓋然性の制限であり、その意味で行動は複雑性を縮減するのである。ルーマンが「この経験のうちで、両者のパースペクティブが収斂する。それによって、この否定性を否定することへの関心、規定への関心を仮定することが可能となる[39]」と述べているように、自己と

---

[36] N. Luhmann, Ebenda，邦訳176p
[37] N. Luhmann, Ebenda，邦訳179p
[38] N. Luhmann, Ebenda, S172 邦訳（上）188p
[39] N. Luhmann, Ebenda, S172 邦訳（上）188p

他者はこの経験の一致をつうじて未規定な状況を規定しようとする関心が生まれてくることになると述べ、それに続けて「ここにはほとんどあらゆる偶然を利用して構造を発展させうるシステムを形成する可能性が待機している[40]」と説明するのであるが、このくだりがまことに評判がよろしくない。要するに、DK は相互の行動の調整問題として顕在化し、そのときに社会システムの創発のきっかけが与えられるということである。

三　DK の自触媒作用

そして、ひとたびシステムが形成されると、それに応じた複雑性の縮減の結果、自己の行為と他者の行為との接続が確定的となるが、このことは、二重の不確定性を再生産することになる。なぜならば、そもそも二重の不確定性は、自己の行為と他者の行為が接続され、二重の条件依存性が成立した状況の中でしか生まれない。しかも、予測はつねに否定される可能性を伴っており、相手の行為が予測される場合でも、相手の行為には「予測とは別様な」行為の可能性が残されている。そのため、システム形成をつうじて行為の接続可能性が確保されたからといって、二重の不確定性が除去されることにはならない。村中知子はルーマンの「DK が自触媒作用をしているということができるのは、DK がみずからを使い果たすことなしに、自他のパースペクティブよりも上位にあるウルトラ・パースペクティブによって、あらたな水準における構造の構築を可能にしているからである[41]」をひいてこのことに説明を与え、さらに「DK の経験は、自他の行動の継続に特有の時間境界を与えており、自他の行動を一定の時間のあいだ律しているウルトラ・パースペクティブとなっているからである[42]」という DK 問題の時間次元における解決に論及している[43]。自触媒作用というのは、DK 問題それ自体がなくな

[40] N. Luhmann, Ebenda, S172 邦訳（上）188p
[41] 村中知子「ルーマン理論の可能性」恒星社厚生閣　1996年　151p

りはせず、形成された社会システムの構成要素であり続けており、DK は形を変えつつ、社会システムにとって問題であり続けているということができる。

たとえば、いかに慣れ親しんだ行動様式や期待にもとづいて他者の行動が方向づけられようとも、他者の行動については規定不可能性が生じている。他者の行動は、予測しようとするまさにそのことによって、規定不可能になるからである。

「ダブル・コンティンジェンシーの問題それ自体が、ダブル・コンティンジェンシーの問題によって生み出された社会システムの構成要素[44]」になるのである。ルーマンは、このようなはたらきを社会システムの「自触媒作用（Autokatalyse）と呼んでいる。本項の最初に述べたように、まさに社会システムの創発は、自他の不確定さの二重化を媒介にして現実化されている。いわば不確実さを活用しているということができる。そして社会システムの創発によって、それぞれがみずからの行動を規定するのが容易になっているのである[45]。

馬場は以上の二重不確定性の DK について「ルーマンの DK の扱いはある意味ではきわめて悪名高い。一言でいうと、DK は自己触媒的性格をもっていて、ひとりでに自己を解決してしまうものというものであるからだ。これではコミュニケーションの成立を説明するものとはいえないとの批判が生じるのも当然であろう[46]」と述べている。たしかに自我と他者との両方の側で

[42] N. Luhmann, Ebenda, S169～170 邦訳（上）185p　関与者は互いに関与しているそのかぎりにおいて、互いに拘束し合っているのであり、同じ時間を共有しているのである。そのさい、双方の間ではダブル・コンティンジェンシーが顕在的な作用をしている。

[43] 村中　前掲書　151p

[44] N. Luhmann, Ebenda, S170 邦訳（上）185p]

[45] N. Luhmann, Ebenda, S166 邦訳（上）180p

[46] 馬場「ルーマンの社会理論」勁草書房　2001年　68p

無規定状態を解決することへの関心が生じたとしても、どのような規定性において解決するかについての一致が生じる保証は何も無いという批判である。確かに、この点については、村中が引用したように、ルーマンも「自他のパースペクティブよりも上位にあるウルトラ・パースペクティブによって、あらたな水準における構造の構築[47]」、「自己準拠に基づく循環は、その関与しているシステムのいずれにも帰すことのできない新しい統一体の原基的形式にほかならない。この循環は、それぞれの関与するシステムにおいて意識内容としてまたはコミュニケーションのテーマとして見いだされる。そのばあいにはいつでも、そうした循環が他のシステムにおいても見いだされることが前提となっている。相手のシステムにもこの循環がみられるという前提は、その基盤となるリアリティがいかなるのであれ、非任意的に成立している[48]」といった自己準拠にもとずく循環として新たなシステムの創発を説明しようとしている。この部分の説明については、次節でのより立ち入った説明を待つことにしよう。

第 2 節　二重不確定性と社会システムの創発

前節では、DK にもとづくオートポイエティック・システム形成の端緒およびその不確定性について述べたが、ルーマンの DK 把握は、パーソンズの DK 問題の処理の限界を突破し、みずからのパースペクティブと他者のパースペクティブとの非同一性という社会的次元の問題性を、時間次元の問題性と結合させるかたちで、DK 問題の解決を提示していることを示唆した[49]。

---

[47] N. Luhmann, Ebenda, S169～170 邦訳（上）185p　ルーマンは、DC の経験から、自他の行動のシークエンに一定の時間の間、律しているウルトラ・パースペクティブが可能となるし、またそれを強制している。そのことに自触媒作用という特性が付随していると説明する。

[48] N. Luhmann, Ebenda, S169～170 邦訳（上）181p

[49] N. Luhmann, Ebenda, S166 邦訳（上）201p　第三章第九節　DK と自己準拠

不確定性から出発し、偶然への感度を高めつつ、不確定であり続けつつ、あるいは不確定であるがゆえに、関与者がコミュニケーションや行為をそれに依拠させるにたる秩序が実際に形成されているというものである。以上のように把握し直されたDKを基礎とすることによって、あらたなる創発水準である社会システムは、それに則って問題にすることができるし、その変化も問うことが可能となる[50]というものである。以下、このルーマンのDK問題とその解決が自己準拠概念を基礎としてオートポイエティックに、より論理的に定式化が行なわれていることを考察する。

DKは、パーソンズにおいては、前章で論じたように、自己の行為と他者の行為の連関に内在する問題として把握されていたのに対して、ルーマンにおいては、それ以上に複雑な問題として把握されている。この問題は、ルーマンのいう基底的自己準拠と社会システムの自己準拠（再帰）[51]との関係のありかたを問うものである[52]。

ルーマンはこのことについて「自己準拠というものは、一方においては、自我のおこなう行為が、もう一人の自我のパースペクティブをとおして自我によって点検されるということなのであり、他方においては、自我のそうした行為は、まさにそのことをとおしてその行為がおこなわれている社会システムに組み入れられているということにほかならない[53]」と述べている。すなわち、個々の行為のレベルでみれば、基底的自己準拠の過程が作動していて、そこにおける自己とは、自己の行なった行為以外のなにものでもない。

[50] 馬場靖雄訳「社会学的概念としてのオートポイエシス」『現代思想』（特集・オートポイエシス）21巻、10号、青土社、1993年の訳注８、126～127p

[51] 村中知子　前掲書　76p 自己準拠における自己の区別に応じて、三つの自己準拠が区別される。そのうちの二つが、この場合の基底的自己準拠とシステムの自己準拠、すなわち再帰である。

[52] 第１章で考察したパーソンズの行為しシステム論に対する批判的吟味の、個体的行為連関と社会的行為連関との関係に相当する。

[53] N. Luhmann, Ebenda, S183 邦訳（上）203p

その場合、自己の行為は、自己の他の行為との選択的な結合のため作り出され、基底的な自己準拠をとおして成立することになる。ところが、この自己準拠は、同時に他我を媒介として作動していて、さらには社会システムに関連するもう一つの自己準拠にかかわっているというのである。

「それゆえ、基底的な自己準拠のためには、一方では行為そのものを他我の観点でコントロールする必要があり、また他方では、行為が当該の社会システムのなかに組込まれる必要がある。換言すれば、行為連関の自己準拠的な構成と社会システムの自己準拠は、同時に成立するのである[54]」と述べているように、DK 問題は、基底的自己準拠と社会的自己準拠（社会的連関）という二つの自己準拠の循環をとおして作動しており、もう一人の自我（他者）をとおしてと、社会システムをとおしてという二つタイプの自己準拠は相克的、相互媒介的に関わり合い結び合っている。このようにルーマンは「基底的自己準拠は、社会的自己準拠（再帰）にとっての構成条件であり、また社会的自己準拠は、基底的自己準拠の構成条件である[55]」と説明する。このことは秩序問題が、前章において、パーソンズの社会行為論を鋳直した社会行為論として把握された個体的行為連関と社会的行為連関という二つの行為連関の相互関係として解明されねばならないことと符合していることは明らかである。

DK の考察をとおして明らかになったのは、「システムがそれよりもはるかに複雑な環境との関係をとおしてしか形成されず、有意味的－自己準拠的な過程それ自体がシステム内的なものとして把握されるということ[56]」である。まさに自己準拠的，オートポイエティック・システムは、環境との関係のなかで形成されつつ、システム内的な過程をつうじて自らを創出する。

---

[54] N. Luhmann, Ebenda, S183 邦訳（上）203p
[55] N. Luhmann, Ebenda, S184 邦訳（上）203p
[56] N. Luhmann, Ebenda，邦訳（上）212p

ルーマンは、以上のように二つの自己準拠が相互連関的に構成されることを突き止めることによって、パーソンズよりも秩序問題に内在する複雑性を大幅に射程に収めることができたということができる。

あとがき

以上本稿では、パーソンズを嚆矢とする社会秩序・社会システムの創出問題の根幹としてのDK問題に焦点を絞り、パーソンズのDK問題の取扱は、社会構成要素としての行為、意味における社会的次元の切り詰めた扱い，時間次元の無顧慮、構造概念への過大な依存等々による、限定的なものにとどまるとはいえ、ルーマンも評価したように社会的行為にもとづく社会的秩序創発のメカニズム解明に一定の功績を残した。

しかし、第2章でも述べたように、DKは行為の不可欠の条件ではあるが、コミュニケーションや行為を行う場合のみに現れるのではない。DK問題は意味の形成と継続的な処理をおこなっているシステム（オートポイエティック・システム）においてはあらゆる事態につねに潜在しているとみるべきである。

その意味で、ルーマンは第1章でも述べたように、DK問題の解決は、社会的次元のみならず、時間次元にもあると主張する。確かにDKの純然たる循環は実際の生活においては見出されない。そうした循環は容易に破られているものであり、ありとあらゆることから偶然に、多くのコミュニケーション、多くの行為が開始される。まさに「初めはなんでもやさしい[57]」のである。その最初のコミュニケーションや行為の規定に依拠して次のものが生起していく。それらの自他の行動は他我の最初の行為からみれば、そのコンティンジェンシーを縮減し、それを決定する効果を有している行為となる。個々のコミュニケーションの意味は、次のコミュニケーションの産出によって形

成され、いくぶんか確定される。意味の成立にとって、コミュニケーションの反復的産出は、欠くことができない。個々のコミュニケーションの意味は、コミュニケーションの反復的連鎖のなかで形成され、DK は時間的にも脱トートロジー化されているのである。その意味でオートポイエシスの開始とその続行は、時間次元における DK の解決であるということができる。

しかし、以上の説明によっては、馬場の指摘したように、まだ DK による社会システム創発のメカニズムは十分明らかにされたということはできない。DK にもとづいて社会システムがなぜ創発するのか。その課題に答えるものこそ社会システムと心的システムとの「相互浸透」なのであり、ルーマンも「相互浸透」について、「コンティンジェンシーの問題で取り扱ったさい、未規定にしておかざるをえなかった問いの一つに決着をつける解答が可能になっている。すなわち相互浸透概念は、ダブル・コンティンジェンシーを実現するための諸条件に関する問いに答えているのである[58]」と述べているとおりである。本稿では、DK に焦点をしぼって、そこからの社会秩序・社会システム創発問題を考察した。相互浸透問題は次の課題に回すことにする。

【参考文献】

[1] N. Luhmann, Soziale Systeme, 1984「社会システム理論」佐藤勉監訳　恒星社厚生閣　1993-95年

[2] N. Luhmann, Zweckbegriff und Systemrationalitat「目的概念とシステム合理性」馬場靖雄他訳　勁草書房　1990年

---

[57] N. Luhmann, Soziale Systeme, S184 邦訳（上）204p ダブル・コンティンジェンシーが偶然を吸引するありさまを表現している。偶然に対して反応しうるということは、社会システムがそれ自体の再生産のために、秩序の欠如した状態を十分に利用できるということ、すなわち「ノイズからの秩序形成」になっている。したがって、コンティンジェンシー概念は、必然性の排除と不可能性の排除にほかならない。

[58] N. Luhmann, Soziale Systeme，邦訳（上）340p

[3] Parsons, T., The Social System, The Free Press, 1951　パーソンズ「社会体系論」佐藤勉訳　青木書店　1974年
[4] Parsons, T., The Structure of Social Action, McGraw-Hill, 1937「社会的行為の構造」稲上毅・厚東洋輔・溝辺明訳　木鐸社　1976-89年
[5] 村中知子「ルーマン理論の可能性」恒星社厚生閣　1996年
[6] 佐藤　勉「コミュニケーションと社会システム」佐藤勉編　恒星社厚生閣　1997年
[7] 正村俊之　前掲書　第三部一
[8] 長谷川公一　前掲書　第一部二
[9] 富永健一「社会学原理」岩波書店　1986年
[10] 富永健一「行為と社会システムの理論」東京大学出版会　1995年
[11] 馬場靖雄「ルーマンの社会理論」勁草書房　2001年
[12] ゲオルク・クニール、アルミン・ナセヒ著　舘野受男、池田貞夫、野崎和義訳「ルーマン　社会システム理論」新泉社　1995年